

ほのぼの

第63号

令和5年

3月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



私も頑張ろう！

前住職

こんな新聞広告がありました。「こんなかわいいおばあちゃんになりたい！百二歳、一人暮らし」というタイトルです。自分らしくご機嫌に老いるためのヒントは①自分を丸ごと好きになる ②自分のテンポを守る ③ひとり時間も大切に作る ④口癖は「上等、上等」 ⑤何げないことをいとおしむ、という五ヶ条だそうです。

これは簡単ではありません。ずいぶん努力されておられる生きざまに拍手喝さいですが、信行寺の檀家さんにもこの人に優るとも劣らない人がいます。長年にわたり町工場を経営されてこられた村本さんです。毎月の命日にお参りさせていただくお宅のご主人です。今年の一月で百二歳になりました。ご健在で、今も現役で仕事をしておられます。奥さんはすでに往生されていますが、毎日息子さんと一緒に仕事をしています。帳簿も受け持ち、製品の発送などもこなしておられます。

病院に行くときは息子さんに車で送ってもらいます。が、病院に着くと受付・受診・会計など、一人です。

せています。これを見ている周りの人たちも村本さんの年齢を聞いてその達者な姿にビックリしているとのこと。私も頑張らなければ」という気持ちになった人も多いことでしょう。

人生百年の時代がきたといわれますがなかなかこのよ

うにはなれません。難しいことです。百歳を超えて元気はつらつの人は人生の達人と言えるかも知れませんが。周りの人のはげみになります。力を与えます。

先日也有難い記事を見ました。人の芝居をよく観に行く俳優さんの生きる姿勢です。上手な人の芝居を観ると、「自分《も》頑張ろうと思う」と。また、下手な人の芝居を観ると「自分《は》頑張ろうと思う」と。今よりも少しでも良い芝居ができるようになるう、という前向きな姿勢を感じます。

人間に成長していこうという気持ちがあっても、これを邪魔しているのが慢心です。「あれくらいのこと



は自分でもやれる、自分ならあんな下手なことはいない」などと、意識に現われていなくてもおごり高ぶる心が潜んでいます。自分より優れていると羨ましく思い、劣っているような人だと無意識に軽蔑しがちです。しかし今日より明日を目指す。明日よりも更に明後日の成長を願う。この姿勢がとれるような心があると気付けるようです。この俳優さんは《私も》と《私は》で端的に表現してくれました。お見事です。

自分の意志でこの世に生まれてきたものはいません。気が付けばこの世に生んでもらった自分がここにいるわけです。また自分だけの思いで生きているものもいませんが、どう生きるかは個人の責任になります。では今の私に何ができるでしょうか。「なにをしながら、生きるのか」のテーマを自分自身に問う時に方向性が見つかるようです。

生きるとは死ぬことではない。新たな自分に生まれ続けること、それを成長するということです。身体の成長は青年期で止まりますが、心の成長は年齢にかかわらず続くそうです。人生を死んで終わらせるのではなく、生まれ続ける道に導くのが仏の教えです。浄土へ

生まれる道です。生きているというのは、死なずにいることではありません。

何もかも分かっているという自己中心主義の自惚れを生きている人を凡夫という。そこに教えがあっても学ぶ心が芽生えないと教えとなりません。「わかつている」と「わかつているつもり」は大違い。「・・・のつもり」を力にして安心しているのは危ないことです。

随分前になりますが「自己主義のかたまり」という文を目にしたことがあります。学期末で忙しくしていたある先生がいました。忙しくしている所に生徒が走って呼びにきました。「先生〇〇君と△△君が喧嘩しているからとめてください」「やらせておきなさい。そのうちにやめるだろうから」と先生の無責任な返事。しばらくして先ほどの生徒がまた先生を呼びに来て言う。「先生、駐車場の車に石をぶつけている。ほっといていいのですか」「それはいいか。先生に言いつけると言って注意しておいてくれ」と先生の返事。すぐに生徒の声があった。「いいんですか。石をぶつけられている車は先生の車で

すよ！」自分の車と聞いてあわてて駐車場へ行き、石を投げていた生徒を叱りつけた先生。それを見ていた先ほどの生徒が一言。「先生は自分のことだったら真剣になつて、僕らのことだったらいいかげんなんだから。嫌になっちゃうな」

この一言で、生徒のことを第一に考えて行動している「つもり」の自分が、実は自分のことしか考えていないという現実を知らされた先生は述懐されたそうです。

私たちもこの先生と同じことを繰り返してはいませんか。「つもり」はあくまで「つもり」です。当てにはなりません。「こんなはずじゃなかった」とこぼすけれども、それだけで終わらせてはあまりにも残念です。学ぶ姿勢をもって対処すれば新たなスタートをきることができます。学ぶことは自分の知らないことを聞くことです。これによって本当のことが知らされます。学ぶ姿勢を持っている限り人生はいつも開かれています。新しい自分が生まれま

新年初法座

令和五年一月五日、新年初法座を勤めました。
最初に、本堂で正信偈のお勤めをし、その後、住職による法話がありました。

今年は最後に、礼拝堂で仏教讃歌を歌ったり、住職の知人に尺八を演奏していただいたりしました。また、住職の馬頭琴と木下さんのピアノ、尺八の演奏がありました。恩徳讃など皆さんで合唱し、楽しいひと時を過ごすことができました。

毎年一月五日は初法座です。来年も皆さんそろってお参りください。



写経の動機や感想

信行寺で毎月一回、第一月曜日十時より写経の会を行っています。参加者は年々増えていきます。現在参加されている方々にどのようなきっかけ、動機で参加するようになったのか、どんな気持ちで写経しているのかなどをお聞きしましたので紹介させていただきます。皆さんも是非一緒にいかがですか。

友達に信行寺の永代供養について紹介していただいたことをきっかけに写経のことを伺いました。以前薬師寺の写経を六十四巻まで終え、中途半端になっていたことが気がかりになっておりました。写経「讃仏偈」百巻を目指してがんばっていききたいと思います。

月一回、住職の法話をお聞きした後、無心で筆を運ぶことにより、静かな落ち着いた時間をもたせて頂いております。お寺で皆様とご一緒に取り組めてうれしく思います。

前坊守様からお誘いいただいて初回から参加させて頂き、もう五年になります。体を動かすのが大の苦手、じっと座っているのが好きな私には写経は相性がよく、楽しく続けさせて頂いております。字は少しも上達しないものの、心静かにお経と向き合う時を過ごせますことを有り難く思っています。これからも元気で皆様とご一緒出来まます様に願っています。

静かな空間で集中すること、文字を書くという環境が少なくなり、時間を共有するということも少なくなり、ファンタジーな世界になってきました。文字そのものは上達しませんが気持ちを楽しませ、自分自身を見つめ直す貴重な空間です。お経についての知識は理解しにくいのですが、心を清め昔の方はどうのように写経をし、人々に教え続けていったのか努力が偲ばれます。少しでも上達して自分の中で満足できる力たちになっていけばと考えています。これからも体力勝負で続けていきます。

東日本大震災追悼に「讃仏偈」を書いたのが初めての写経です。お寺から「写経の会」のお誘いがあり、お経を覚える機会を設けていただき、毛筆書の挑戦を始めることとなりました。礼拝堂で心静かに写経を始めると、雑念が遠のき清廉される思いです。前坊守からアドバイスを頂くことでさらに励みとなり、終了後頂く一服のお茶はおいしく毎月感謝の気持ちと共に楽しく写経を続けています。

「一筆入魂」いつも大切な時を過ごさせていただいています。



「師主知識の恩徳・・・」法然上人④

住職



地方の人々に念仏を勧めるのが永年の念願であったと法然上人がおっしゃったように、京都を離れて讃岐（流刑地となった場所）へ行く途中に訪れた神戸や高砂などで地元の人達に念仏の教えを勧められた話が今も伝わっています。漁師や遊女など自身の生業に罪の意識を密かに感じていた人達も、称名念仏ひとつで救われていくという法然上人の教えによって、その後は熱心な念仏者となっていきました。

法然上人が讃岐に着いた頃、京都では最大の支援者であった門弟の九条兼実が亡くなってしまいました。その後、小松の生福寺に留まって地元の人達に念仏の教えを説かれる生活をしばらくされますが、京都を離れて八ヶ月後には赦免となります。しかし京都に戻ることはなかなか許されず、四年間箕面の勝尾寺にとどめ置かれることになります。

そして、八十歳の高齢になられた法然上人が京都に戻ることをようやく許され、時を同じくして越後に流罪となっていた親鸞聖人も罪を許されました。しかし、結局法然上人に今生で再会することはできませんでした。帰洛後二ヶ月もたたないうちに法然上人は病床にふされてしまったの

です。最期が近づいた法然上人の様子を記録した「御臨終日記」によれば、高齢で体力は衰え、ここ二、三年耳は遠くなり意識がもうろうとなりがちであったが、昔のように耳目は明瞭になり、往生のことだけを語り、念仏は絶えることなく睡眠中も舌口はかすかに動いて念仏されていたと伝えられています。

そして臨終の二日前、門弟の源智の頼みに応じて書かれた「一枚起請文」が法然上人の御遺訓となりました。文字通り一枚の紙に称名念仏の意味、心構えなどが平易な和文でまとめられていて黒谷金戒光明寺に今も所蔵されています。浄土真宗ではあまり馴染みがありませんが浄土宗では日々の勤行でとなえられているようです。「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞとおもいとりて申す外には別の仔細候わず。」この言葉は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という歎異抄の言葉を思い起こさせます。そして最後は「愚鈍の身になして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」と結ばれます。決して自分を智者であると見せかけteおごりたかぶったりすることなく、ただ素直にお念仏をいただきなさい。まさに愚禿親鸞と名乗られた親鸞聖人は法然上人の教えを正しく引き継いでおられます。

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、三月の言葉の説明をします。



ころに
じごくがあるよ
ひにちまにち
ほのをがもゑる

浅原才市は浄土真宗の妙好人のひとり。妙好人とは、善導大師や親鸞聖人が、真実の信心をいただいた人のことを讃えられた言葉ですが、江戸時代以降に編集された『妙好人伝』では、多くは一般庶民で真実の教えにめざめ、お念仏の生活を送った人を指します。信心を詠んだ多数の詩で知られ、三月の言葉は「妙好人 才市の歌」に集録されています。「さいちころに、なにがある。さいちころに、じごくがあるよ。ひにち、まいにち、ほのをがもゑる

る。めにわめゑねど、これが正をこそ、ありがたいな。をやさまが、わしのころい、なむあみだぶと、とろけやい、ごをんうれしや、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

才市さんは、自分の心の中に地獄がある。その証拠に毎日の生活の中でその地獄の業火が燃えさかっていると言われています。

歎異抄に「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」とありますが、これが私たちの本来の姿です。

最近、我が子の虐待やスマホが原因の事件などが起こっています。誰も最初から虐待しようと思う親はいないでしょう。子育てが思い通りにいかない、相手の予想もなかった言葉に激高し様々な犯罪を引き起こしてしまうのではないのでしょうか。

地獄とは視覚で見る世界。でも、また一般的に考えられているような死後に赴く世界なのでもなく、阿弥陀さまの救いのはたらきに出遇った者が、本当の自分のすがたに出遇った時に、そうとしか表現できない世界のことをいうのです。

信行寺行事予定とご案内

春の彼岸法要

三月二十五日（土） 住職
二十六日（日） 前住職
両日とも午後二時～三時半ごろ

第二十二回 門信徒会総会

四月二十二日（土） 午後二時より
おつとめ・総会・法話

花まつり

四月七日（金）

実施内容はコロナの状況をみて検討します。
詳しくはお寺まで問い合わせください。

ほのぼの編集委員を募集しています。気軽に
お寺までお問い合わせください。

編集委員より

二回目の編集委員となりました。前回、長井さん、月田さん、泉井さんと寺報「ほのぼの」の係に携わったのはもう何年も前のことです。寺報が仕上がるまで毎週お寺に集合していました。

今は定例の後に年三回編集会議を開き、話し合って掲載記事を決めます。締め切りまでに副住職が原稿を集め、パソコンで編集します。出来上がると編集委員にメールでデータが添付され、編集委員それぞれがそのデータを見て誤字脱字や内容の確認作業をし、副住職にメールで返事をします。こんなにも時代は変わっていくのだと感じています。コロナ禍では、ベストな方法です。

変わらない方がいいものもあります。年二回、法要前の本堂、礼拝堂の掃除です。お寺に通い始めたころ、大先輩の萬（よろず）さんに手順を教えて頂き、終わった後の法友の方々との語らいも楽しく勉強になりました。ずっと続いてほしい有難い奉仕です。

中川 さなみ